

| 大賞 | **グントゥール ヴェンカタ スバラオ 氏**
(Dr. Guntur Venkata Subbarao)



国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター
生産環境・畜産領域 主任研究員 / インド
1960(S35)年8月14日生まれ 63歳(7月19日現在)

表彰理由:

現代の農業における窒素肥料の大量使用は温室効果ガスの排出源ともなっている。その原因となる土壌での硝化活動(N_2O の生成)は、特定の植物の根から放出される物質により抑制されることを世界で初めて発見し「生物的硝化抑制」(BNI)と命名した。さらに、抑制効果の高い小麦の品種改良により、BNI強化小麦を実用化した。これにより、窒素肥料の大量投入の抑制と収穫量確保の双方が実現。土壌の硝化抑制により環境負荷の低減につながり、世界の持続可能な農業と環境保全の実現に多大な貢献をした。

主な研究・活動について:

窒素肥料は現代農業に欠かせないが、施用した窒素の多くは、土壌中の硝化菌の活動により流出し、環境と生態系に問題を引き起こしている。受賞者は、植物の持つ「生物学的硝化抑制(BNI)」(根が特定の物質を放出して硝化菌を抑制する)を発見し、この機能を野生コムギから導入することで、BNI強化コムギの開発に成功した。BNI強化コムギは窒素肥料を効率よく使用しながら高収量が期待できるため、窒素肥料使用量を半減でき、コムギ生産からの環境負荷の低減に向け、世界的な注目を浴びている。

年(西暦)	
1984	Indian Institute of Technology 応用植物学修士課程修了
1990	Indian Institute of Technology 作物生理学博士課程修了
1997	NASA Advanced Life Support Systems Research Group 主任研究員
1999	ケネディー宇宙センターDynamic Corporation 主任研究員
2000	国際半乾燥地熱帯作物研究所(ICRISAT) 作物生理学コンサルタント
2001	国際農林水産業研究センター 研究員
2006	国際農林水産業研究センター 主任研究員

大賞 | ケイト・ケランド 氏
(Ms. Kate Kelland)



感染症流行対策イノベーション連合(CEPI)
首席科学ライター / 英国
1969年11月15日生まれ 54歳(7月19日現在)

表彰理由:

ロイター通信の記者時代に、除草剤「グリホサート」(商品名・ラウンドアップ)に「おそらく発がん性がある」としたIARC(国際がん研究機関=WHOの下部組織)の評価をめぐる、IARCの研究者に不正があったことを裁判資料等から明らかにして報道。IARCが科学的根拠を無視した発がん性評価をしていたことを明らかにし世界の注目を浴びた。この報道は欧米での訴訟や承認に影響を及ぼした。除草剤の使用は大規模な農業では不可欠で、各国の農業生産に大きな影響を与える。農業にかかわる分野での、科学的な根拠に基づく正確な情報の重要性を調査報道により示した画期的な出来事となった。

主な研究・活動について:

将来の疾病発生に備えることの重要性や、CEPIの科学的パートナーシップについてのプレゼンテーション、スピーチ、社説、記事を書いている。また、現在、人類に最も重大な脅威を与えるウイルスの家族についての記事シリーズも執筆している。このシリーズ『The Viral Most Wanted』はCEPIのウェブサイトで開催され、vaccineswork.comなどの他のメディアでも配信されている。

2021年にCEPIに参加する前は、ロイターの特派員を務めており、ほぼ27年間のジャーナリズムキャリアの最後の12年間はグローバルヘルスと科学をカバーしていた。彼女の報道は、感染症の流行からワクチン、診断および治療法、がん、慢性疾患およびメンタルヘルス、環境および農業科学に至るまで幅広い分野にわたっていた。

年(西暦)	
1993	ダラム大学卒業、ドイツ語とロシア語の学士号取得
1993	ロイターの国際研修記者
1994	ロイターオランダ支局の外国特派員として1年間勤務
1995	ロイター英国支局の金融市場特派員
1996	ロイタードイツ支局の外国/経済特派員として1年間勤務
1997	BBCテレビの旗艦番組「ニュースナイト」のヨーロッパ政治プロデューサー
1999	ロイター英国支局およびアイルランド支局の一般ニュースおよび政治特派員
2009	ロイター欧州・中東・アフリカ支局の保健科学特派員
2020	ロイターグローバルヘルス特派員
2021	CEPI(感染症流行対策イノベーション連合)の首席科学ライター
2023	著者 - Canbury Press より「DISEASE X - The 100 Days Mission to End Pandemics」を出版
(受賞歴)	
2010	健康ライター協会最優秀オンライン特集賞 受賞
2011	抗菌薬耐性との闘いに関する報道で、EU全体で欧州健康ジャーナリスト賞共同 受賞
2012	英国で欧州健康ジャーナリスト賞 受賞
2013	英国で欧州健康ジャーナリスト賞 受賞
2016	WHOの改革の必要性に関する記事で医療ジャーナリスト協会年間最優秀特集賞 受賞
2017	IARCとグリホサートに関する調査報道で外国報道協会年間最優秀科学記事賞 受賞
2018	グリホサートの科学的評価に関する調査報道でロイター企業報道年間最優秀記事賞 受賞

佐野藤三郎特別賞 | 八丁 信正(はっちょう のぶまさ) 氏
(Dr. HATCHO Nobumasa)



一般社団法人海外農業開発コンサルタンツ協会 会長
近畿大学 名誉教授 / 日本
1954(S29)年3月21日生まれ 70歳(7月19日現在)

表彰理由:

地球規模での水資源の確保の重要性が急増している中、農業の開発適地の減少、開発コストの上昇、水資源の拡大の困難や灌漑農地の拡大、水資源の確保の必要性と改善・向上について研究。

水資源の課題について利用効率の向上を目指したソフトウェアの開発を行い、灌漑・水管理の関わる世界に跨る情報のデータベース化を作成し、統合的な水管理と改善を図る為の情報管理システム(SIMIS)の開発を行った。

イリノイ大学やFAO、近畿大学、農林水産省などでの研究活動により、国際水田・水環境工学会等から数々の受賞。灌漑水管理に関する研究活動は高く評価され国際的な農業水管理の研究発展に大きく寄与した。現在、海外農業開発コンサルタンツ協会会長として若手人材育成や研究指導に貢献している。

主な研究・活動について:

農業部門における水資源の利用効率の向上ためのかんがいシステム管理のソフトウェアの開発を行った。そこでは、特に途上国における灌漑効率の向上を目的として、灌漑水管理に関わる情報のデータベースを作成し、それ用いた統合的なシステム管理とかんがい水管理の改善を図るための情報管理システム(Scheme Irrigation Management Information System: SIMIS)の開発を行った。また、国際水管理研究所(IWMI)の理事・理事長として、世界中の水研究者の育成にも関与するとともに国際的な農業/水管理に関する研究発展に寄与した。加えて、国際協力機構(JICA)等の事業管理委員として、世界の農業開発事業の実施、運営の効果的実施に貢献した。

年(西暦)	
(学歴)	
1976	岡山大学 農学部 農業工学科 卒業
1979	岡山大学 農学研究科 農学修士 修了
1985	イリノイ大学大学院 農業経済専攻 修了(人事院国費留学制度)
1996	農学博士(岡山大学)
(職歴)	
1980	農林水産省 農林水産技官
1990	国連食料農業機関(FAO)専門職員
1994	近畿大学農学部助教授(～2000年3月)、教授(2000年4月～2020年3月)、名誉教授(～現在に至る)
(受賞歴)	
2005	国際かんがい排水委員会(ICID) Best Performing Workbody Award 2002-2005年 受賞
2007	国際水田・水環境学工学会(PAWEES) Best Reviewer Award 受賞
2010	(公社)農業農村工学会 国際貢献賞 受賞
2015	国際水田・水環境学工学会(PAWEES) International Award 受賞

| 21世紀希望賞 | 別府 茂(べっぷ しげる) 氏
(Dr. BEPPU Shigeru)



一般社団法人 日本災害食学会 理事・副会長 / 日本
1953(S28)年3月29日生まれ 71歳(7月19日現在)

表彰理由:

企業在職時から、災害が多い新潟県で「災害時の食の研究」を追求。災害食の長期備蓄という考え方から、新たに「ローリングストック」という発想を提案し、また「災害食」という新たなカテゴリーを構築した。さらに、防災食、介護食、治療食を研究し製品化、ビジネス化に貢献。「日本災害食学会」を創設した。

現在、国際標準化機構(ISO)の作業部会で「国際認証規格」制定が進められているが、その下地には当学会が始めた「日本災害食認証制度」と、健康ビジネス協議会の「思いやり災害食認証制度」がある。

主な研究・活動について:

1995年に発生した阪神淡路大震災をきっかけに、被災地の食問題の研究を開始。当時、勤務していたホリカフーズ(新潟県魚沼市)において災害時の食問題の調査・研究を担当し、レスキューフーズの開発に従事した。2004年新潟県中越地震では自ら被災し、高齢者をはじめとする被災者の実態やニーズを踏まえた災害食の必要性を痛感し、現在に至るまで、災害食分野の様々な調査・研究の成果を全国に発信し、生活の強靱化に取り組んでいる。

年(西暦)	
1977	新潟大学農学部卒業
2003	ホリカフーズ(株)(新潟県魚沼市)にて企業内研究者として災害食、介護食の研究・開発に従事
2008	防災士資格取得 No.000377
2009~2024	博士(歯学)取得 新潟大学
2018	新潟大学大学院自然科学研究科 客員教授(食品科学技術論)
現在	ホリカフーズ(株)取締役執行役員を退任 (一社)日本災害食学会 理事・副会長

地域未来賞 | 新谷 梨恵子(あらや りえこ) 氏
(Ms. ARAYA Rieko)



株式会社 農プロデュース リッツ 代表取締役 / 日本
1978(S53)年2月3日生まれ 46歳(7月19日現在)

表彰理由:

結婚を機に小千谷に居住し、新規就農してサツマイモスイーツの加工商品で起業し地域活性化に貢献している。新潟県6次産業化プランナーとして商品化・企画で新規農業者をサポートし多くの実績を上げている。

(株)農プロデュース リッツを設立しサツマイモの商品販売や農家レストランを経営し、地域の主婦を中心に障害を持つ人を雇用して農福連携にも貢献。また宿泊施設も整備してインターシップや農業研修者を積極的に受け入れ農業の人材育成を行い、施設を地域の交流拠点とし開放し、地域活性化にも貢献している。女性就農者や経営者として評価が高く多くの賞を受賞している。

主な研究・活動について:

「さつまいもで町おこし」の想いから農カフェ経営・6次産業化プランナー・農家の営業代理店・農作業作業受託・農産物生産、加工、販売をプロデュース。女性の働きやすい職場作り、食育活動、農福連携、農業インターン受け入れ等、人材育成にも取り組む。

年(西暦)	
2004~2015	有限会社農園ビギン 専務取締役
2014~2022	小千谷市教育委員
2018~2020	新潟県青年農業士会 副会長
2015	株式会社農プロデュース リッツ 創業
2022	小千谷市商工会議所 青年部 副会長
2024	小千谷市商工会議所 女性会 副会長
(受賞歴)	
2017	日本商工会議所 女性起業家大賞「最優秀賞」受賞
2023	女性活躍表彰 女性起業・新規事業開拓部門「農林水産大臣賞」受賞
2023	農林水産祭 女性活躍の部「内閣総理大臣賞」受賞

地域未来賞 | 三ツ井 敏明(みつい としあき) 氏
(Dr. MITSUI Toshiaki)



国立大学法人新潟大学 社会連携推進機構 特任教授 / 日本
1959(S34)年1月19日生まれ 65歳(7月19日現在)

表彰理由:

令和5年新潟県は夏季の異常高温と渇水によるコシヒカリのコメの白濁化が多発して、品質低下と収量の大幅減少により大きな問題となった。三ツ井氏はイネの「澱粉分解機構の分子メカニズム」の研究で、地球温暖化による品質の低下に強い関心を持ち、高温・高CO2登熟による玄米白濁化のメカニズムを解明する研究を進めた。その結果、高温耐性を有するコシヒカリの開発に成功し、令和5年9月に「登録名:新大コシヒカリ新潟大学NU1号」を誕生させた。実証実験で高温登熟耐性と良食味が実証され、新潟県の稲作を救う期待と貢献は大きい。また海外研究者との交流を通じて、先端バイオ研究において活発な国際共同研究を展開し、国際連携の枠組みの中で気候変動下に於けるイネの品質向上に貢献している。

主な研究・活動について:

イネにおけるデンプン分解酵素の基礎研究を、生理・生化学的、および分子細胞生物学的手法を駆使して精力的に進め、その一方で、「高温に強いコシヒカリ」の研究に取り組み、新大コシヒカリ(品種名:コシヒカリ新潟大学NU1号)を開発した。さらに、海外の研究者との密接な交流を通じて気候変動下における作物生産向上に貢献すべく国際共同研究を展開している。

年(西暦)	
1981	立命館大学工学部化学科 卒業
1983	名古屋大学大学院農学研究科生化学制御専攻博士前期課程 修了
1986	名古屋大学大学院農学研究科生化学制御専攻博士後期課程 修了 農学博士取得(名古屋大学)
1986	日本学術振興会特別研究員 採用
1986	新潟大学助手(農学部) 採用
1993	新潟大学助教授(農学部) 昇任
2002	新潟大学教授(農学部) 昇任
2024	新潟大学社会連携推進機構特任教授 採用
(受賞歴)	
1999	日本農芸化学奨励賞(テーマ:イネ種子発芽制御の分子メカニズム解明) 受賞
2018	日本応用糖質科学会賞 受賞 (テーマ:イネにおける澱粉代謝関連酵素の応用分子細胞生物学的研究)
2024	新潟県刈羽村村政功労者表彰 受賞